



博士（人間科学）学位論文 概要書

フランスにおけるアンセルシオン政策の
現代的意義

(雇用・教育および福祉の横断的連携に関する一考察)

2000年1月

早稲田大学大学院人間科学研究科

松本 明

アンセルシオン最低所得 RMI は、在来の社会保護制度の間隙を埋めるべく、第三の施策として社会的な要請を受けて登場した。しかし、今日、RMI を始めとし、社会保護諸制度が肥大化の傾向にあるのは疑う余地がなく、危機的状況の証である。RMI と失業の分布図が符合している。現在までの種々の雇用創出施策を以てしても、労働市場の希薄化という障壁に遭遇する。

極めて深刻な生活上の問題を抱えた人にとって、アンセルシオンとは経済的自立の方向へ性急過ぎずに向かうことである。アンセルシオンの成功は容易ではなく、当人の能力から最大限のものを引き出し、与えられた状況の下で、できる限り、ということの意味する。アンセルシオンの成功を RMI からの脱退率で測定する場合もあり、多少なりとも、RMI から脱却している人も存在する。

しかし、所得の保障等により、排除を解消することを是とする国民連帯あるいは社会的アンセルシオンを実施していく上において、当面の社会費用の増大が余儀なくされる。このためにも新たな連帯と更なるアンセルシオンが求められる。

これは、多面にわたるアンセルシオンという目標の周辺に社会福祉並びに雇用・教育政策を再定義することを導く。そのためにも、この目標に携わる人材の養成は国全体の急務であり、逼迫した雇用の創出の観点からも二重の重要性を包摂しているからである。

社会的な排除に陥っている人々のアンセルシオンを援助することをその使命の一端とするソーシャルワーカーの職務についての研究は、多分野に亙り学際的な研究が求められ、殊に人間に関する包括的な洞察および観察を要件としている。また、学校教育、職業資格および職業遂行能力との間における整合性の担保が求められる。

一般的にも、現場の業務間における硬直性と拮抗する業務間相互の柔軟な乗り入れが積極的に評価されていく必要がある。また、これと補完し合うものとして、十分な柔軟性を以て人材の開発並びにその途用が行なわれることが求められる。その実現のために克服されるべき障害として、いくつかの硬直性の類型が想定される。すなわち、実践に対する理論の硬直性、社会的・経済的移動性の障害となる社会的・経済的硬直性、社会に対する学校の硬直性、学術領域間の交流又は学際に対する「蛸壺」意識等の硬直性、職業教育に対する一般教育の硬直性、労働編成における現業部門に対する管理部門の硬直性、業務全般に亙る部署の間における硬直性、人格的要素に対する専門技能もしくは知識の硬直性等が列挙される。

国際的な課題でもある雇用創出と社会的な連帯の促進、並びにそれらの間の整合性を担保すべく社会的な活力が伸長するための基本的な一要素として社会のニーズに応じられるということが挙げられる。そのためには然るべき人材が鍵となり、その形成に、現場経験は助長する力となり得る。現場で経験を積んだ者が理論的な補足を獲得したり、現場経験をしつつ、教育の場との間を往復することは、社会のニーズに真に対応していくためには不可欠となってきた。

RMI 並びに不安定雇用労働の非典型的な形態と共通する性格に着目する。RMI は、従来の社会保護制度の枠組を超え、その網の目から脱落する社会層を救済する装置として期待されて創設された。一方、非典型と称される不安定雇用労働も古典的な雇用労働の捉え方からは逸脱、脱却、もしくはこれを超越しているものであり、実際の職業社会において次第にその比重を高めていっている。換言するならば、現実の経済・社会状況およびそれに伴うニーズの変化に従い、これらに支えられ、また逆に働きかける制度も変遷を辿ることは必然的なことであり、その制度を捉える観念的な枠組も

当然変化していくことを余儀なくされる。

同様に、大学を頂点とする学校教育システムも、多様化し際限なく変化する現実の社会あるいは世界の態様に目を背け、孤高の牙城に安住を続けていくことは最早困難となりつつある。世の中の大きな流れ、時代や社会状況から生ずるニーズに鋭敏に感応し、硬直した学問の壁や領域間の障壁を柔軟なものにし、形骸化しつつある学生—社会人という古典的な二分法も克服すべく、彼らを社会統合した形で教育機関に受け入れると同時に、「教育機関の社会統合」も社会の要請としてこれを真摯に受けとめ、現場における実践と学校教育における理論との隔たりの解消が切に求められている。